

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム(2018)第18巻:70-71

第36回 日本糖質学会年会開催のご報告

若宮 伸隆, 大谷 克城

学会の動向

第 36 回 日本糖質学会年会開催のご報告

若 宮 伸 隆*、大 谷 克 城**

去る、平成 29 年 7 月 19 日 (水) ~ 21 日 (金) の 3 日間、第 36 回日本糖質学会年会を、旭川市民文化会館にて滞りなく開催できましたことをご報告いたします。本州では早くも台風の訪れまであり、天候が懸念されましたが、幸い旭川の地は会期中、天候に恵まれました。旭川医科大学職員の皆様、旭川医大医師会をはじめ、多くの皆様のご支持、ご援助を賜り、おかげ様で、全プログラムを無事終了することができました。

日本糖質学会は、糖質の総合的科学的に関する基礎ならびに応用研究の発展向上をはかり、糖質研究者および技術者相互の連携と交流を深め、もって文化の向上に寄与することを目的とする団体です。本学会は、医学、薬学、理学、工学、農学と幅広い分野にまたがる糖質科学全般を扱うために、特に全員が一同に会する年会は非常に重要です。また、本年会は、参加人数としては中規模学会 (400 - 1000 人) ですので、新潟県長岡市、高知市などの地方都市でも開催することで、地域における糖質科学の啓蒙にも非常に役立っております。特に、北海道では平成 10 年北大斉藤政樹教授による開催以来、20 年ぶりの道内開催となりました。

学会が、例年に比べて 2 か月の早い開催ということでしたが、申し込み口頭発表演題数は 95 演題 (A 発表 36 題、B 発表 59 題) とポスター発表 162 演題をいただき、総数 257 演題を数え、前回の年会に比して約 15% 増となりました。また、学会参加者も 450 名を超える方々にご参加いただきました。

年会初日の午後は、総会、奨励賞受賞講演、男女共同参画企画、特別講演を行いました。総会では、伊東信会長から深瀬浩一新会長へ日本糖質学会の舵取りが

渡されました。男女共同参画企画としては、本学復職・子育て・介護支援センター「二輪草センター」センター長の山本明美教授による、本学で進められている「二輪草プロジェクト」の講演をいただきました。先進国のなかで、もっとも早く高齢化が進む我が国において男女共同参画は、高齢者の社会参加とともに、非常に重要なテーマであると考え、本年会においても、男女共同参画講演を総会の日で開催しました。また、男女共同参画委員会の事業計画に挙げられている年会保育室設置に関しまして、託児室を会場内と懇親会会場にも設置し、4 人の方に 3 日間託児室を利用いただき、子育て中の研究者にも積極的に学会活動ができる環境を提供できました。さらに、女性 PI サポートの一環として座長の男女比をほぼ同じとしました。特別講演は、生命科学分野から大阪大学長田重一先生、北海道地域からは旭川市旭山動物園坂東元園長をお招



*旭川医科大学 微生物学講座 教授 **旭川医科大学 微生物学講座 准教授

きし、ご講演をいただきました。長田重一先生は、「細胞膜の非対称性とその崩壊—フリッパーゼとスクランブラーゼ」というタイトルで脂質や糖質が生命現象に深く関与すること、次に登場された坂東元園長は、旭山動物園の50周年記念の標語「伝えるのは命」のタイトルで、「動物園はただ動物を飼育する場所ではなく、動物の命をつなぐ場所であること」を講演され、聴衆は、オランウータンの両親と子供の動画を見て感動し、生きることの意義を考えました。2日目と3日目の朝には、川寄敏祐先生と木曾真先生にレジェンドレクチャーをしていただきました。いずれも、両先生のライフワークの話で聞き応えのあるご講演でした。

ここ数年の本学会では、ワークショップなどの特別プログラムを組まれていましたが、今回の年会では、若手会員が口頭発表できる機会をできるだけ与えることをメインに据えて既存プログラムの充実を考えました。しかし、例年よりも多数の口頭演題申込がありましたので、口頭発表の時間を短縮し、さらに、座長に関しても、極力若手から選抜し、できるだけ男女ペアになるように、プログラム委員の先生方に配慮をいただきました。実際、3日間の口頭発表、ポスター発表とも質疑やコメントが非常に活発に行われ、学会が着

実に世代交代を進めており、次の世代の活躍の期待を予感しました。

懇親会については、会場を一週間前に花月会館に変更しましたが、250余名のご参加をいただき、深瀬浩一新会長の挨拶、笠井献一先生の乾杯で宴が始まりました。宴の半ばには、菅野流創始者初代菅野孝山以下(息子、孫)の親子三代共演による津軽三味線の演奏を聞いていただきました。演奏者を身近に感じる距離で、太棹による津軽三味線を生で楽しんでいただきました。

本学会は、多くの学会からの共催、協賛、後援をいただきました。また、デフレの厳しい経済状況にも拘わらず、道内の団体や企業を含む、多くの財団、団体、企業から、ご援助、展示、広告にてご支援いただきましたことを深く感謝申し上げます。オール北海道で臨んだ世話人の先生方(北大門出健次教授、坂入信夫教授、札幌医大高橋素子教授、帯広畜産大浦島匡教授)に、学会運営において多大のご協力いただきました。最後に直前にも関わらず懇親会を引き受けてくださった花月会館の渡邊会長、社長に深くお礼申し上げます。

来年の年会は、復興が進む仙台での開催となります。糖質科学の一層の社会貢献を祈って、旭川年会のご報告とさせていただきます。



ポスター発表会場



懇親会の様子 (花月会館にて)



会場の様子 (旭川市民文化会館)